

解 題

1 大原農書文庫の名称と由来

岡山大学農業生物研究所が、前身の財団法人大原農業研究所（大正3年＝1914設立の財団法人大原奨農会を昭和4年＝1929改称）から引き継いだ図書には、内外の雑誌、自然科学、農学等を中心とする図書のほかに、旧書庫3階に別置されている図書がある。このたび、それらのうちのすでに「特殊文庫」として整理されてきている、Pfeffer文庫、大原漢籍文庫の両文庫以外の一群の和装本群782点2,576冊を分類整理し、これを大原農書文庫としてその目録を刊行した。これまでの上記二つの文庫とこの大原農書文庫というこの三つの「特殊文庫」が岡山大学大原文庫を構成する。岡山大学は、大原農業研究所からこの大原文庫を引き継いだのである。

岡山大学農業生物研究所は、財団法人大原農業研究所の移管によって成立した。岡山大学への移管終了時の昭和27年（1952）に大原農業研究所は、日本809種、諸外国45ヵ国800種の雑誌・報告類を擁し、岡山大学は洋書71,257冊、和漢書43,173冊、合計114,430冊を引き継いだ（『財団法人大原農業研究所』昭和36年＝1961）。この蔵書を擁した農業図書館の創設は大正10年（1921）で、それまでの1,000余冊を移管するとともに、図書蒐集が急速に行なわれた。『財団法人大原奨農会要覧』（大正15年＝1926）には、「而して従来購入せる図書の外に大原家よりの特別寄附金によりて農学、生物学、理化学に関する洋書、和漢書を蒐集したり。以て研究員の研究資料となすのみならず又之を開放して一般の閲覧に供して農業の進歩に貢献せんとす。」とあり、さらに、「図書蒐集につきて記さば独逸ライプチヒ大学植物学教授プエッファー氏が、大正九年に没するや大正十年に同氏遺書一万三千三百五十三冊を纏めて購入したり。次に山口弥輔氏が、大正十一年より大正十三年まで独逸に在りて莫大な図書を蒐集せり。又大正十二年に松本圭一、西門義一の両氏支那に渡りて農業に関する漢書を蒐集したり。右の外随時購入せる図書も亦尠からず。」と記し、大正15年（1926）3月現在の蔵書冊数として、総数41,216冊、内訳洋書32,210冊、和漢書9,006冊としている。

ここに記されているところの大正10年（1921）に購入した故Pfeffer教授旧蔵図書がPfeffer文庫である。また大正12年の中国での蒐集漢籍は、昭和40年（1965）に、岡山大学附属図書館農業生物研究所分館によって『大原漢籍文庫目録』が、『農業研究』第51巻1・2号（創立五十周年記念）付録として刊行されている（別に昭和49年＝1974に『岡山大学所蔵近世庶民史料目録 第3巻』に「四庫分類法」に従った新目録を収録）。この「目録」のまえがきには、上記兩名を中国に派遣し、漢書を蒐集せしめたのは「故大原孫三郎氏が、中国は元来農業国であり、当然農業に関する貴重な文献がある筈であるとの配慮の下」であると、創設者大原孫三郎氏の発想によることを記している。この「目録」まえがきには、「なお分館には大原漢籍文庫のほかにも、若干漢籍、本草書のあることを附記する。」とあるが、ここに附記されたものが、この「大原農書文庫」である。

上掲引用文のように、Pfeffer文庫、大原漢籍文庫については購入時期が記されているが、この農書については記されていない。「受入簿」によると、この農書文庫の購入時期は大正10年（1921）119点・713冊、大正10～11年58点・200冊、11年169点・686冊、11～12年49点・87冊、12年127点・285冊、

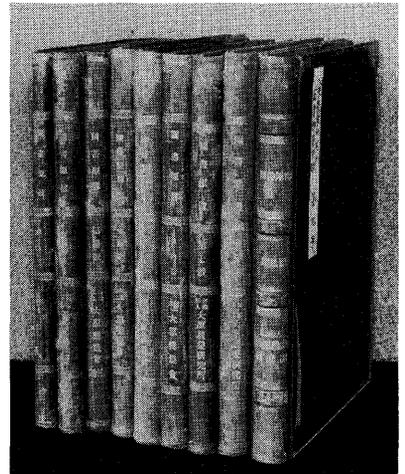
12～13年1点・5冊，13年107点・244冊というように，大正10・11・12年という時期に最も集中している。それ以前はわずか4点・5冊に過ぎない。このように農書蒐集は農業図書館が設置された年とその直後であり，Pfeffer文庫，大原漢籍文庫の蒐集と同一の時期である。その動機については記されていないが，農業の自然科学的研究において，わが国在来農学という伝統的・歴史的背景とのかかわりを重視するという視点を推測することができよう。

2 大原農書文庫の内容と価値

本目録は日本十進分類法に従って分類してある。この基準に基づく分類結果によると，それは，総記から文学までの総ての部門となり，多岐にわたるものとなる。しかしその内容を見ると，一見農業と関連のない部門のものであっても，農業に関連のある限りのものであるといえるものである。著例をみよう。たとえば，9部門（文学）に分類されるものでも，「俳諧煙草集」（刊本），「華実年浪草」（刊本），「これこれ草」（刊本），「未開牡丹詩」（刊本）というように，煙草・草・牡丹という植物名を付したものであり，このようなことで蒐集しているのである。0部門（総記）の随筆は農学者によるものを主としており，1部門（哲学）の場合，倫理学・道徳でも「報徳外記」（明治期刊本），「衣食訓」，「教訓商農録」，「民家分量記」，「民家雑談」，「菜根百事譚」，「治生草」（いずれも刊本）などあるいは菜・根など農に関するものを冠したもので，農民教訓のものである。このように，広義には農業書と関連するものとして蒐集されたものといえよう。多部門にわたっているとはいえ，明らかに本草・農業に関するものが中心であって，ここに収斂する蒐書となっているのである。この文庫のなかには，明治以降の刊行物もかなりの点数となる。広い時代にまたがっているが，近世期を中心としている。

このなかには漢籍の和刻本，漢籍そのものがかなり含まれている。漢籍には，「農桑輯要」，「三農紀」，「二如亭羣芳譜」，「佩文齋広羣芳譜」などの農書・植物に関する重要な書物があるが，それとともに漢籍の和刻本が少なくない。それらのなかには，武林銭衙本による万治2年（1659）の「本草綱目」和刻本，「天工開物」の明和8年（1771）和刻本，「救荒本草」の享保元年（1716）和刻本，「食物本草」の慶安4年（1651）和刻本，「神農本草経」の寛保3年（1743）和刻本，「秘伝花鏡」の文政12年（1829）和刻本（以上いずれも刊本）など，多く使用された重要なものがある。そして，これらの和刻本の刊本とともに，とくに本草学に関する書物が蒐集されている。「用薬須知」（刊本），「食療正要」（刊本），「怡顔齋梅品」（刊本），「怡顔齋桜品」（刊本），「怡顔齋蘭品」（刊本）などの松岡玄達のものをはじめとして，小野蘭山の「本草綱目啓蒙」（刊本），「本草綱目訳説」（写本），「花彙」（島田充房共著 刊本），貝原益軒の「大和本草」（刊本）などである。

このように多岐にわたるとはいえ，主体は以上の本草とともに近世期および明治期の農書である。その内容であるが，近世期についていえば，今日，この時期の農書の基本的と思われるものはかなり蒐集



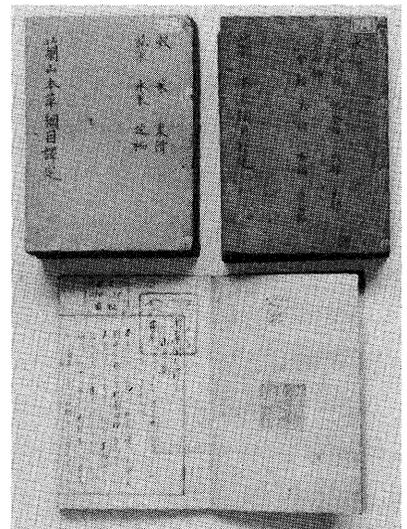
受入簿

されている。最も体系的な、そしてわが国最初の刊行農書である宮崎安貞の「農業全書」をはじめ大蔵永常、佐藤信淵などのいくつかが、ことに大蔵永常のものは、「農家益」(刊本)、「老農茶話」(ただし明治期の刊本)、「農稼肥培論」(同前)、「農具便利論」(刊本)、「再種方」(明治期の刊本)、「除蝗録」(写本)、「豊稼録」(刊本)、「製葛録」(刊本)、「油菜録」(刊本)、「農稼業事後編」(刊本)、「綿圃要務」(刊本)、「国産考」(刊本)、「徳用食鑑」(刊本)などの18点を蒐集し、明治期になってからの刊行の多い佐藤信淵のものは、「草木六部耕種法」(明治期の刊本)、「農政本論」(同前)など14点を蒐集している。また、岡田明義「無水岡田開闢法」(刊本)、加藤寛斎「菜園温古録」(写本)、田村仁左衛門「農業自得」(刊本)、吉田友直「開荒須知」(写本)、土屋又三郎「耕稼春秋」(写本)、児島如水「農稼業事」(刊本)、河合元「穂に穂」(刊本)、小西篤好「農業余話」(刊本)、宮地簡「農家須知」(写本)などの地域ごとの特徴を濃厚に示す重要な農書なども蒐集されている。農書にあって相対的に独自性をもつ蚕書も、塚田與右衛門「新撰養蚕秘書」(刊本)、上垣守国「養蚕秘録」(刊本)、成田重兵衛「蚕飼絹節」(明治期の刊本)など主要なものが蒐集されている。さらに、最古の園芸書といわれる水野元勝「花壇綱目」(刊本)、内容的にみてわが国古典園芸書として価値の高いとされている伊藤伊兵衛「花壇地錦抄」(刊本)をはじめとする園芸(鑑賞植物)書を収集している。以上あげたものは多く写本あるいは刊本で現存するものがあり、あるいは明治以降各種叢書などに収録、活字本として刊行されているものではあるが、農書のコレクションとしては欠かせないものである。

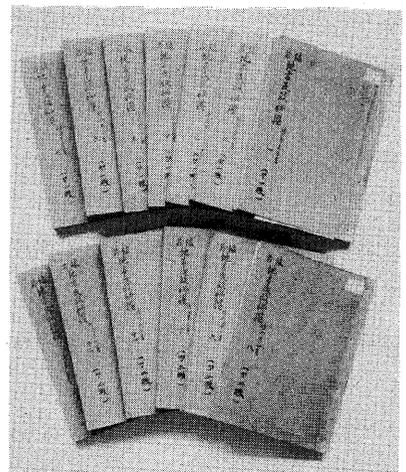
明治期のものでは、林遠里「勸農新書」、中井太一郎「大日本稲作要法」、梅原寛重「田圃駆虫実験録」をはじめ、石川理紀之助、小柳津勝五郎、奈良専二などのいわゆる老農の手によるものがそれなりに蒐集されている。また、部門では工芸作物、果樹、養蚕、蔬菜、家畜へとひろがりをみせている。

これらのなかには、国初以来慶応4年(1868)までのわが国作成書物を集大成した『国書総目録』に記載されていないものが少なくない。それらのなかには、そこでの収録の対象外とされた地方史料の写本などもあるが、記載対象に相当すると思われるものでありながら、そこにみられないものも少なくない。一例をあげれば、小野蘭山の「本草綱目記聞」(写本)・「本草綱目訳定」(写本)などで、これらはこれまでの数多い本草綱目注解書にさらに加わるものとなるであろう。また、鳩谷恭正「備前地方民政秘鑑」(写本 弘化3年=1846 13冊)は、村役人としての立場からの村治マニュアルであり、「地方凡例録」の備前版とも言い得るものである。このように、貴重なものが含まれている。

『国書総目録』に掲載されながらも、現物が無いもの、あるいは



本草綱目訳定

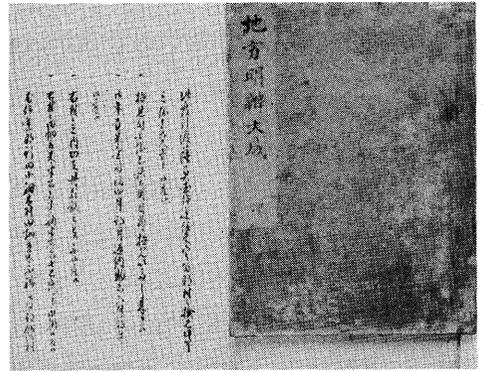


備前地方民政秘鑑

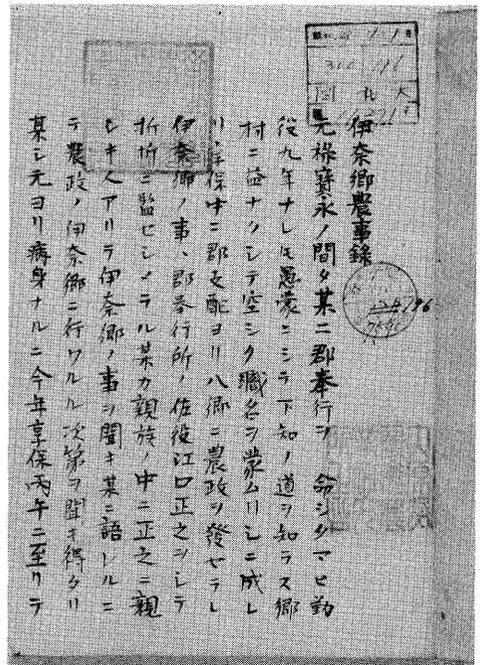
はその数の少ないものなどいくつかここにはある。「往来田卷物之写」(写本)は写本が一つ、菊池海莊「農兵諭言」(刊本)は写本が一つ、鎌倉石見「開厥賑粥法」(刊本)は刊本が一つ、「大嶋竊覽」(写本)は「大嶋見聞録」として写本が一つ、「開荒須知」(写本)、「桑仕立方」(刊本)は写本が一つ、「綿羊訳説」(写本)は写本が一つ、「漁村維持法」(写本)は稿本が一つのみである。また、「観農固本録」,「地方落穂集」などを集めた「地方道元集」に収録されている「臥治撮要」は写本が一つあるのみである。二つのみ、三つのみというものはさらに多くある。

掲載されながらも現物がなくなってきたものもいくつかある。石原清左衛門「地方明弁大成」(写本)は、『国書解題』に記載があるということで『国書総目録』に記載されているが、現物はなくこれが唯一のものである。享保11年(1726)成立の「伊奈郷農事録」は、現存は『日本経済叢書 第4巻』,『日本経済大典 第7巻』に収録されている活字本のみであり、本文庫のものは唯一の現物写本である。『国書総目録』の刊行は昭和35年(1960)であり、また所蔵機関調査対象を限定しているなどのことにより、あるいは必ずしも十全ではなく、これらあるいは他にも存在しており、またそれが確認されているかもしれない。しかしこれらは、ともあれ現段階では確認できる唯一の現物である。加藤寛齋「菜園温古録」(写本 慶応2年=1866 1冊)は現時点での唯一のものとして確認できるものの著例である。この水戸藩北部を対象とする農書は近時に『日本農書全集 第3巻』(昭和54年=1979)に翻刻されているが、底本には小野武夫編『日本農民史料聚粹 第9巻』(昭和17年=1942)所収のものが用いられている。その解説には、『彰考館図書目録』には、「菜園温古録 1(冊)写」とあり、戦前には写本が彰考館文庫に架蔵されていたことは確かであるが、現在はなく、戦災により焼失したものと考えられる、としている。

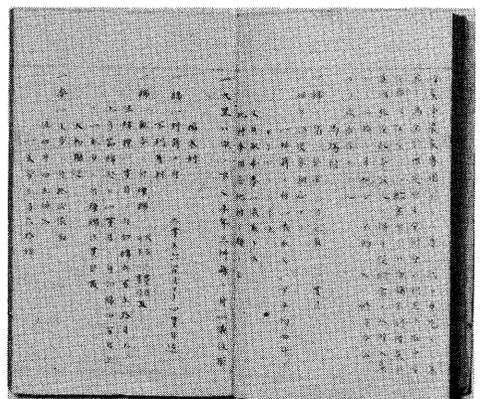
大原農業研究所の研究の中心は種芸部、農芸化学部、植物病理部、昆虫部の4部門を主体とするものであった。自然科学的研究であり、輝かしい成果をあげ、名声を博した。



地方明弁大成



伊奈郷農事録



菜園温古録

その研究を推進するためには、最新の研究成果・動向の蒐集こそ、文献蒐集では何にもまして重要なことであり、多くの内外の雑誌・報告書類を蒐集し、関連文献を蒐集している。しかし、それとともに、漢籍、近世農書が蒐集されて、大原農業研究所は農業・本草学に関する漢籍と農書のコレクションを所蔵するところとなった。岡山大学はこのような貴重なコレクションを引き継ぐことができた。なお、そもそも財団の運営は、大原孫三郎の寄付による100町歩の小作地の小作料によって賄われていたが、図書購入の費用は、特殊な機械器具の購入とともに大原孫三郎による特別寄付金によって賄われている。財団の運営費が大正8(1919)～13年頃は年間5万円というときに(この経常費は4乃至5部門の研究所としては、他の公共農事試験機関に比してかなり多額であったという)、図書購入費は、大正11年(1922)3万円、12年1万3千円、13年1万1千円という大きさであった(前掲『財団法人大原農業研究所史』)。

この大原農書文庫のものは、これまでに、翻刻の底本などとして使用されてきている。筆者の知るところでも、『明治中期産業運動資料。第一集農事調査 第6巻』の影印版「福井県農事調査書」は東京大学経済学部所蔵のものを本文庫のもので補ったものであり、筆者は、本文庫のものをもってその解題を記した。また、最近の『日本農書全集 第29巻』収録の「穂に穂」の翻刻・解題にも、本文庫のものが比較対照の一つとされている。これからも研究の資料として、あるいは刊行の底本などとして、多く活用されていくものである。

(経済学部教授 神立春樹)